
朝一番に届くもの

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝一番に届くもの

【Nコード】

N2971D

【作者名】

tensuke

【あらすじ】

某新聞のCMで見かける玉木宏さんをモデルに書きました「僕は毎朝出逢う新聞配達の青年に惹かれてゆくその思いは何なのか少年期のコンプレックスや揺れる気持ちを表現できたらと思います

1・早起きは・・・（前書き）

某新聞のCMご存じですか？

あの玉木さんをイメージして頂けたら嬉しいです

1・早起きは・・・

1・早起きは三文の徳

早起きは三文の得

徳なのか得なのかさだかじゃなかった

国語 あんまり得意じゃないし

そもそもインターナショナルスクールに通う自分は
日本語よりも英語の方が自然でもあり楽でもある

そんな自分がこんな言葉をふと思い出したのは

本当にささやかな「得」だか「徳」を朝一番に見つけたから

それは試験勉強で珍しく徹夜をした日

白々と明け始めた空の明るさに誘われて
外の空気を吸おうと玄関先にサンダルをつっかけて
ただぼんやりとつたつていた時だった

「おはようございますっ！」

耳に心地よい低音の美声が響いた

「へっ・・・」

その声の持ち主は 僕に新聞を手渡すと
自転車を走らせて颯爽と去っていった
ただぼんやりとその後ろ姿を見送った

それは僕にとって衝撃だった

タオルを頭に巻いて 自転車のカゴと荷台には
山盛りの新聞を積んで

彼は白い息を吐きながら微笑んで言ったのだ

「おはようございますっ！」

その声のなんと甘やかに心地よかったことが
その笑顔のなんと爽やかだった事が

同性ながら惚れ惚れとする程の整った顔立ちと
自転車にまたがった長い脚
すらりとした均整のとれた体つき

あんな風に生まれたかったんだよなあ・・・
僕は鏡の中に夢見続けていた理想型を見た気がした
僕とは全く違う生き物
あんな人がいるんだなあ・・・

早起きをした日

正確には 朝まで起きていたある日の朝
僕は夢のような美青年を見た

あんな風に生まれたかったんだよなあ・・・
こんな・・・

こんな・・・童顔で歳よりいつも幼く見られて
女子にまで可愛い可愛いと言われるような外見じゃなくて
あんな風に生まれたかったんだよなあ・・・
凛々しくて 男気に溢れたような
格好いいなあ・・・と思うような

その日から 僕の早起き生活が始まった

2・新聞配達の青年

2・新聞配達の青年

平たく言って

憧れている というのが正しい状態なんだと思う

あんな風に生まれたかった そう思う

僕は毎朝 我が家に届けられる新聞を

玄関先に立って待ちかまえるようになった

それは「彼」によって届けられる朝一番の僕の楽しみだった
いや

新聞が楽しみというよりも

新聞を届けてくれる「彼」が僕の秘かな楽しみだった

「おはようっ 早いね」

彼の笑顔が眩しくて 僕はいつも小さく「どうも」と
呟くのが精一杯で

受け取った新聞を握りしめて彼の後ろ姿を見送る

両親が愛読している新聞は僕にとっては面白くもなく
他紙に変えてくれと何度か申し入れをした事もあった

しかし 今となっては「彼」が届けてくれるのなら

僕はその新聞がどの何でもいいと思っている

彼は本当に格好いい

すらりとした長身で均整のとれた綺麗な筋肉質の体型をしている
手足が長く とても小さな顔はとてつもなく端正で爽やかだ
たぶん見事な9頭身

僕は美術部で絵を描いているのでついそんな見方をしてしまう

彼の顔立ちは　ただ整っているというよりとても魅力的だ
細い鼻梁に続く唇が少しだけふつくらと厚く

長い睫に縁取られた大きな瞳は少しだけ優しげなタレ目だったりする
それでも　綺麗なカーブを描く眉毛や強い光を放つ視線のせいか
彼は深い笑窪をたたえても尚　凛々しく決して女性的には見えない

真珠色の肌がとてもキレイで

新聞を手渡してくれる大きな手は指が驚くほど長い
そして　その声が極めつけの低音の美声ときている

こんな人がいるんだなあ・・・

毎朝　つくづく感心してしまう

僕もこんな風に生まれたかった・・・

僕のスケッチブックにはいつ頃からか理想の男性像が描かれていた
全てが曲線で表現できてしまうような

自分の外見がキライだった

鋭利な刃物みたいな鋭くとがった外見に憧れていた

今　僕のスケッチブックには

朝一番に出逢う「彼」の姿が描かれている

あんな外見で過ごす人生って

どんななんだろう・・・

一日でいいから「彼」になってみたいなあ

僕の憧れの理想型が　毎朝一番にやってくる

3・僕について

3・僕 について

僕は某インターナショナルスクールのハイスクールに通う17才父親がフランス人なので 髪の色も瞳の色も少しだけ色素が薄い身長は173センチ 体格はごくごく普通に平均値

顔立ちは 物心ついた頃から言われ続けてきた

「女の子みたい」に「可愛い」 らしい

小動物系 と よく言われる
うれしくない

アライグマとかタヌキとかポメラニアンとか

なんだか どことなく平和的な生き物ばかりに例えられる

僕はもつと獰猛な野性的な生き物に憧れている

例えられるなら チーターとかヒョウとかがいい

犬ならもつとしなやかな大型犬がいい

毎朝出逢う「彼」は例えるなら アフガンハウンドとか

ポインターとかボルゾイとか そんな雰囲気がある

「可愛い」愛玩犬ではなくて

気高い品とそこはかとない色気をたたえた佇まい

媚びることのない孤高の存在

そんな雰囲気は僕は憧れる

「彼」は日本人離れた端正な顔立ち とも言えるが

僕などのような本当のハーフ顔からすると

随分と涼しげな日本人ならではの美形なのだと感じられる

大きな黒い瞳も どちらかといえばその白眼の美しさに惹かれる

唇の端がきゅっとつりあがったような微笑みと
深く刻まれる笑窪も 全てが涼やかで嫌味がない

あんな風に生まれたかった

僕のこんな気持ちは「憧れ」と表現するには少し邪念が多すぎる
純粹な憧れではなく どこか「嫉妬」を含んだ思いだから

「彼」のパーフェクトな姿に僕は「嫉妬」すら覚える
それでも

僕は毎朝 「彼」を待ちかまえずにはいられない

「彼」の姿を朝一番に見られれば

僕はいつか自分も「彼」に近づけるような気がして

「彼」から何かを盗み取りたいとも思っているのか
自分でもよく判らない

僕は 毎朝「彼」を待ちかまえる

3・僕について（後書き）

感想・コメントなどお寄せ頂けますと
今後の励みになります
よろしく願いいたします

4・危険な思い

4・危険な思い

こつそりと 彼を捕らえて標本にしてしまいたい
そうすれば いつでも好きなだけ彼を眺めていられる
危険な思いが僕ととらえる

何かの映画で見たことがある

女性を捕らえてコレクションするサイコな奴のスリラー映画
僕にはそんな度胸も根性も腕力もない
だから

実際のところ 彼を捕らえて標本にしてしまう事は不可能だ

でも

僕は彼の事をほとんど何も知らない
毎朝 届けられる新聞を受け取る その一瞬の笑顔と
おはようの一言しか 僕は知らない

彼はどんなヒトなんだろう

彼にはどんな家族がいて

どんな家に住んでいて

どんな恋人と どんなふうに愛を語るのだろうか

僕の彼への想いは日に日に大きくなり

自分でも手に負えない程に膨れあがっていった

そして それは本当に偶然の出来事だった

その日 僕の両親は前日から親戚の家へとでかけており

家には僕一人つきりだった

そして 夜中から降り続いた雨がその雨脚を強め
外は真っ暗で寒かった

それでも 僕はいつも通り

彼の到着を待ちかまえていた

傘をたたく雨が激しい音をたてる

そんな僕の目の前で 彼の自転車が横転したのだ

激しいブレーキ音と すれちがっていったフラフラとした原付

「あぶないっ！」 そう思った時 彼は原付をよけて横転した

「大丈夫ですかっ！！」 僕は傘を投げ捨てて彼に駆け寄った

「いつてえゝ・・・参ったなあ」 彼は自転車をおこしながら苦笑
していた

その困ったような微笑みが僕の心臓を鷲掴みにした
僕はカラカラとかわいてゆく口で必死に話しかけた

「大丈夫ですか・・・」

5・危険な思い2

5・危険な思い 2

自転車に積まれていた朝刊が散乱していた
僕は彼を手伝ってそれを拾い集めた

ふと見ると 彼の左手から血が流れていた

「ケガ・・・ケガしてる・・・」

「あ・・・ああ擦りむいちゃったね」

ペロリと左手の血を舐めた彼の舌の動きに
僕の鼓動はこれ以上ない程に早まった

自分でも何が何だかわからない

なのに 妙に冷静な自分が彼に話しかける

「ばんそこう 持ってきますから ちょっと待ってて・・・
雨に濡れるから 玄関に入って下さい」

「いや・・・大丈夫だよ ありがとう」

「いいから・・・消毒しておいた方がいいです」

「・・・じゃ お言葉に甘えて」

彼が僕の後について玄関に入る

僕は家に入るとタオルと救急箱をかかえて玄関に戻る

「これ・・・使って下さい 随分 濡れてる」

「ありがとう」

タオルを受け取ると 彼は着ていた上着を脱いだ
しみこんだ雨でTシャツが肌に張り付いていた

僕の目は彼の無駄のない綺麗な筋肉のついた胸元に釘つけになる

僕の激しく高鳴る鼓動にも

僕の凍り付いたような視線にも彼は気づかない
彼は濡れた黒髪をタオルで拭っている
その横顔は 清廉な清々しさに満ちて
それでいてたまらない艶やかな色気を放っている

僕にはないもの

僕の欲しいもの

僕がこうありたいと願ってやまないその姿
その全てが今 目の前にあった
手を伸ばせば届くすぐ目の前に

僕にその力があつたなら

僕は彼を捕らえて標本にする

そして一人自分だけのものにしておきたい

誰の目にも触れさせたくない

誰の手にも渡したくない

今 目の前にいる彼に

僕の思いは伝わらない

僕の思いは

一体 何と表現したらいいのだろうか

これは 何？

僕の乱れに乱れた心の内は決して外には出てこない
僕は冷静に彼に消毒を施しばんそこを貼ってあげる
彼はにっこりと微笑むと

「ありがとう たすかったよ」

そういつて 家を出て行く

濡れた新聞を庇いながら 自転車にまたがり

「それじゃ また」

そう言つて彼は去つていく

僕に残されたのは 手渡された朝刊

そして 彼が使つたタオルが一枚

僕はタオルと新聞を抱き締めた

6・そして

6・そして彼と知り合う

「おはよう」　いつもの笑顔がそこにある

「おはようございます」　受け取る朝刊が暖かい

「昨日はありがとう」

「いえ・・・」

「おかげで傷もひどくならなくて済んだよ」

「・・・あ・・・よかったです」

「いつも新聞待っててくれるよね」

「えっ・・・はい」

「嬉しいんだ　手渡しで受け取ってもらえるとさ」

「・・・・・・」

「じゃ　また」

「あ・・・はい」

僕は何も言えなかった

僕のよこしまな思いに彼は力ケラも気がついていない

まさか自分が標本にされかかっていたなんて

よもや自分が嫉妬に満ちた羨望の眼差しで見つめられているなんて

彼は微塵も気づいていない

彼は疑いもしない

彼はその爽やかな笑顔で僕に「嬉しい」とまで言った

凛々しくて

美しくて

たまらなく魅力的な笑顔で「手渡しできて嬉しい」と彼は言った

待ち伏せる僕の気持ちは
伝わって欲しいのか
気づかれたくないのか
自分でもよく判らなくなる

僕は 彼が欲しいんだ
彼になりたいんだ
でも本当は・・・

僕はようやく気がついた
彼の事が好きなんだ
僕は彼に恋してる
彼のあの腕に抱き締められたらどんなだろう
彼のあの胸元に顔を埋めたらどんなだろう
彼の唇は柔らかいのだろうか
彼の吐息は

僕は今の今まで知らなかった
同性に恋をするなんて
思いもよらない事だった
たぶん

これは「彼」のせいだ
きつと「彼」は全ての人間に恋される
それは女性も男性も
大人も子供も関係ない
きつと「彼」は全ての人間に恋される
そんな存在なんだろう

だから

僕は今日から自分の思いに決着をつける

明日の朝

彼に会ったら告げてみよう

僕の思いを告げてみよう

きっと彼は驚いて

信じられないという顔をするだろう

僕は恥ずかしさと後悔で小さく縮み

その場で消えてなくなるだろう

それでも僕は告げてみる

朝一番に届くもの

それは僕の憧れのヒト

7・朝一番の告白

7・朝一番の告白

「おはよう いつも早いね」

「お・・おはようございます」

「はい 新聞」

「あ・・ありがとうございます」

「じゃ」

「あ・・あのっ」

「んっ？」

「あの」

「うん」

「僕 貴方に憧れてて・・・」

「え」

「僕 貴方になりたいって思うほど・・・その」

「うん」

「その 名前も何も知らないから・・その」

「結城聡史だよ」

「え」

「結城聡史といいます」

「はい」

「僕も毎朝君が待っていてくれるのを楽しみにしてました」

「え・・・」

「綺麗な亜麻色の髪の毛の 最初は女の子だと思ってました」

「はあ・・・」

「声を聞いて男の子だと判りました」

「・・・」

「それでも 僕は最初に君を見た時のドキドキが忘れられません」

「えっ」

「とても綺麗な少女に恋をした　と思いました　ははは変かな」

「そ・・・そんな・・・」

「失礼だよ　ね　こんなの　女の子だと思って勝手に恋をして
そんなこと言われても君だって困るよね　ごめんごめん」

彼は朗らかに笑ってちよつとはにかんだように僕を見た

僕はどう答えていいのか判らずに

ただ彼の顔を見つめていた

「僕も・・・僕も貴方に恋をして・・・」

彼は大きな黒い瞳を更に大きく見開いて

知らず真つ赤に頬を染めた僕を見た

そしてその瞳はゆつくりと細められ

この世のモノとは思えない優しい笑顔に溶け込んだ

「ありがとう」

彼は僕にありえない程の笑顔を向けてそう言った

そしてゆつくりとその手がのびて

僕の頬を包み込んだ

それは夢にまで見た彼の長く美しい指

僕はそのままそつと引き寄せられて

白々とようやくあけてゆく一日の空の下

僕は生まれて初めてのキスをした

彼の唇は柔らかく　そしてほんのり暖かった

優しく触れて離れていった

その唇の感触は

僕の頭を真っ白にした

「君の名前もおしえてくれる？」

彼の声到我にかえる

「環・・・沢村 環」

「うん・・・わかった」

彼は僕に右手を差し出した

僕も答えてその手を握った

固く握手を交わしたのち 彼はにっこり微笑んだ

「環 これからもつと君の事を知りたい」

「結城さん・・・」

「また明日」

「はい」

「それか・・・」

「はい？」

「この新聞を配り終わったら」

「・・・終わったら？」

「もう一度 君に会いに来る」

「僕に・・・」

「会いに来る」

「はい」

それじゃあ あとで と言が残し

颯爽と自転車は去っていった

とりあえず

僕は彼を捕らえて標本にしなくてもよくなった
犯罪者にならずにすんだ

そして

思いがけずに成就した思い

朝一番に届くもの

それは僕の最愛のヒト

T h e E n d

7・朝一番の告白（後書き）

お粗末様でした（爆）

新聞配達玉ちゃんに恋した「僕」はきつと

世の中に沢山いるんじゃないかと・・・

「ワタシ」だと当たり前すぎるから「僕」でした（爆）感想・ご批判
なんでもアリです

どうぞ作者にお聞かせ下さいませ よしなに・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2971d/>

朝一番に届くもの

2010年12月26日15時13分発行